

る。こうして石灰藻の研究も分類と生態研究に力点が置かれたが、1年しか研究費がないために、防止対策まで研究の手が届かずに終わったのは致し方のないことであったが、研究者の努力で大きな成果を納めた。

教授室での先生

先生のご在職中、講義のない日を選んで私はたびたび教授室に先生を訪ねた。その頃は約束もまったく取らず、先生のご都合も考えず訪ねたと記憶しているが、今にして思えば汗顔の至りであるが、先生は何時も快く迎えてくれた。初めは研究の現状で色々アドバイスをして頂いたが、話が弾んでくると話題があちらこちらに飛ぶことも再三であった。ある時には、その頃の学生気質に触れられ「昔と違って（戦前？）今学生を採集旅行に連れて行く場合でも、旅費の要求があるし、なんでも要求することばかりだ」と言われていた。私たちの時代には全部自費が建前で、標本を作る紙の果ても自費で購入したものである。借りたものは吸取紙位のものであった。先生に時代が変わったのですよと申しあげるひと幕もあった。

話題が外国の研究者の研究活動に及ぶや、その頃精力的に研究活動され、業績を印刷発表していたアメリ

カの某研究者の研究論文について「ラテン語の記載は誰々に、写真は誰々に、図は誰々に感謝する等記載しているが、自分は何をするのかね」と皮肉ったものでした。しかし何でも一人で行う当時の日本の研究者が及ばなかったのは、アメリカナイズされた研究論文の発表に際しての分業化といった研究手法に理解の少なかった為でもあった。

先生の偉大な足跡は、全世界に及ぶことで、昭和46年夏にバンクーバーのUBCで開かれた学会に出席した私は、Prof. Scagelやその他の学者から「Dr. 山田の後は誰だ」と聞かれたが、この意味は「日本の藻類研究のリーダー」を言われたのか、「教授のポスト」のことか一瞬戸惑ったものであった。それほど先生はこの世界の頂点に立っておられたのだという感を深くした。職場が近かったせいもあり、私ほど足しげく先生をお訪ねし、ご教示を公私にわたり頂いた者も少ないのではないかと、その幸運を喜んだものである。先生のご生誕百年に際して、永かったご指導の中で、まだまだ書き足りないことが沢山あるが、またの機会があるとすればその時に譲りたいと思う。

(061-2271 札幌市南区藤野一条七丁目22-12)

千原 光雄：山田幸男先生

プロローグ

「Sapporo から来たのか、Professor Yamada のところからか？」が1960年代初頭に初めて渡米した私が行く先々の藻学者たちにまず問われた言葉であった。その都度、「No！ そうではないのだ。しかし、Professor Yamada の講義は聞いた」と答えたことを今でも思い出す。学部がどこを出たかはさ程の問題でなく、どこで大学院で学んだか、そして誰に学位をもらったかが、ここアメリカの学界では大きな関心事であることがしばしば滞在して大学院制度を理解するに及んでよくわかった。それはともかく、いかに山田幸男先生の名が国際的に知られているか、いかに先生の名声が高いかを、渡米早々改めて再認識することとなった。

山田先生の臨海実習

山田幸男先生に初めてお会いしたのは1951年春、東京大学理学部の講義室であった。ここへ至るまでには若干の経緯がある。当時、私は東京文理科大学の3年生（旧制の大学は3年制であった）で海藻の研究を目指していた。それより1年程前、私は恩師三輪知雄先生の指導で管状緑藻の細胞壁主要構成物質の研究を始めた。緑藻の細胞壁の主要構成糖は、高等植物ではほとんど例外なくセルロースであるのと対照的に、グループによって違っているようだ。糖質の分析方法や研究の方法を身につけるには管状緑藻は良い材料であり、その研究結果は管状緑藻の分類や系統を考える際に貴重なデータを提供するだろう。といった趣旨のこ

とを研究を始めるに当って先生はお話をされた。私はせっせと酸で藻体を加水分解して粗繊維をとり出し、透析をやったり、旋光度を調べたりして糖を同定する実験に励んでいたが、先生や学友達と材料取りに再々出かけるうちに、生来の海好きと潜水好きが頭をもたげ、それに材料のハネモやイワヅタやミルなどが未だ生殖や生活史すらはっきりわかっていないなどを知るに及び、フィールドを主体の海藻の研究をやってみたいと先生に申し出ていた。2年生が終わろうとするある日、三輪先生に呼ばれた。「この春、山田幸男先生が集中講義と臨海実習で東大に來られるので、授業を受けなさい。山田先生にも授業担当講座の本田(正次)教授にも話してある」との有難いお言葉である。高名な山田先生の講義を聞くことが出来る。私の胸は高鳴った。三輪先生はしばしば山田君と言い、山田先生も三輪君と言われることがあった。ほぼ同年輩で、東大では講座は違ったが、共に海藻を研究材料にされたことでもあり、親しくされておられるようにお見受けした。山田先生の集中授業は前半の2日半を本郷で講義

し、3日目の午後に三崎の臨海実験所に向い、土曜日まで海藻採集、同定、標本作成などの実習であった。授業では緑藻・褐藻・紅藻の形態・分類が主で、体構造・生殖・生活環などの図をネガから起こして印画紙に焼き付けたカード式の資料(受講生は北大方式と呼んでいた)を配布して講義をされた。既に先生の著書、岩波講座「藻類」(1933)や「分類植物学、上巻」(養賢堂、1935)などを読んでいたので講義は理解しやすかった。三崎では実験所前、浜諸磯、小網代、三戸浜などへ行った。胴乱を肩に掛けられ、足袋にわらじであった先生は船を降りると、きまって砂浜を小走りに駆けるように目的地に向かわれるのが印象的であったが、あるとき、私たちを向き「潮の良いうちに早く・・・」とおっしゃられた。当然なことではあるが、成る程と、私は妙に納得した記憶がある。当時は適当な海藻図鑑がなく、あっても古本は学生にとって目玉の飛び出るほどに高価であった。先生に直接教えていただけるのはこの上なく有難いことである。傍らにへばりつくようにして、先生の説明は一言一句洩さないようにと心がけ



図1 山田幸男教授を代表とする「石灰藻の研究班」のメンバー。前列左より瀬木紀男、中村義輝、瀬川宗吉、新崎盛敏
後列左より片田 実、尾形英二、須藤俊造、三輪知雄、田中 剛、山田幸男、長谷川由雄、黒木宗尚、時田 郞、千原光雄、山
崎 浩(敬称略) 東京教育大学下田臨海実験所(現・筑波大学下田臨海実験センター)にて、1953年秋。

たことを覚えている。

山田先生が代表の石灰藻の研究プロジェクト

山田先生との再度の関わりは思いかけず間もなく巡って来た。東京教育大学理学部の助手になって下田臨海実験所に勤務していた私は、「農林省水産庁の補助金により山田幸男教授を代表とする磯焼け防止対策・石灰藻の研究が組織され、君はそのメンバーの一員となった。瀬川宗吉先生(当時、九大水産・助教授、後に教授、故人)の班に入って研究に努めるように」との書面を恩師三輪知雄先生からいただいた。保育社の原色日本海藻図鑑(1956)の著者として知られる瀬川先生は、昭和17年(1942)九州大学に移られるまで約7年半を伊豆下田の須崎にあった三井海洋生物学研究所(現・須崎御用邸)に勤められ、紅藻サンゴモ類の解剖分類学的研究により学位を得られた山田先生の高弟の一人である。戦後三井研究所は活動を停止していたが、標本や研究資料をそのまま残して九大に赴任されたことから、瀬川先生は春、夏、冬の休みには下田臨海実験所にかなり長く滞在して三井研究所に通っておられた。さて、私に与えられたテーマは「胞子発芽初期におけるサンゴモ類と他の有用海藻の競合関係の解明」であり、具体的にはサンゴモ類とテングサの胞子を同一スライド上に放出・発芽させ、両種の発芽体の接触状態を観察することと、天然でそのような状態を見つけ出して丹念に観察することであった。後の話しになるが、調べていくうちに、分類群により胞子の大きさに違いがあること、発芽の際の胞子の分割様式に違いがありそれは分類群により特異的であること、成熟時期も分類群によって特異的であることなど、本テーマとはやや逸れるものの、副産物として分類学的に興味ある成果が幾つも得られ、国際誌を含めて7篇の論文を発表することが出来、私にとっては稔りの多いプロジェクトであった。瀬川先生の班は班長を含めて3名であり、他の班員の一人は尾形英二さん(当時、大阪市立大・助手、後に水産大学校教授、故人)で、テーマは「天然におけるサンゴモ胞子の散布動態の研究」であり、尾形さんの主たるフィールドは伊豆白浜沖のテングサ藻場近くと臨海実験所前の鍋田浜であったので、瀬川先生と同じように、下田に長逗留することが多かった。

1953年の夏過ぎに「石灰藻の研究プロジェクト」の中間成果報告会が下田臨海実験所で行われることとなった。下田住人の私と下田準住人の尾形さんは会議場の設営や駅までの出迎えなどで忙しい2日間であっ

たが、当時、日本の海藻研究をリードしておられた高名な先生方を多数お迎えし、高揚した気分の毎日であった(図1)。当時はサンゴモが磯焼けの要因となるジプロモメタンなどの化学物質を分泌するなどとは知る由もなかったので、各班の研究は専ら観察と生態調査が主体であった。生化学的研究は三輪先生の班(班員:古谷庫造・東京学芸大助手、後に教授)のみで、それはカニノテ属の藻体の石灰の沈着量と石灰化の機構などについてであった。私はスライド上に人工的に作った競合関係にあるサンプルや、潮間帯あるいは低潮線下から潜水で採取した同様の状態を観察できる転石や岩の破片を展示して与えられたテーマの成果報告をしたが、前述の成熟時期や胞子の発生初期分割様式についても触れた。メンバーには分類学者が多かったせいか興味をもって下さる方が多く、山田先生はじめ幾人かの方々から質問と激励の言葉をいただいた。東京教育大一筑波大を通じて私の在任中にこのように錚々たる海藻研究の学者が多数下田臨海実験所の一室に会したことは二度となく、実験所にとっても私にとっても記念すべき年となった。

山田先生と沖縄採集旅行

1960年の秋の学会でお会いした折り来春沖縄行きのご予定があると伺った。学位論文の作成をすませていた私は、実はかねてから懸案の暖海産緑藻の研究で沖縄行きを計画していたので、沖縄ではぜひ一緒にさせて下さいと申し上げ、琉球大学で落ち合うこととなった。私はロックフェラー財団のアタッシュと琉球大学で会う用件があったので4月早々に渡琉し、5月に来られる先生をお待ちした。那覇港にお迎えしたときの先生について今でも記憶に残ることが二つある。一つは大きな一眼レフのカメラ、あとで知ったがゼンザブロニカという機種で最近求められたという、をお持ちであったことと、二つ目はひどくお疲れの様子であったことである。これもあとで伺ったが、鹿児島からの船旅は海が荒れ、それに一等船室は船の高所にあったので揺れがひどく、船酔いにたいそう悩まされた由であった。船はもうたくさんですとおっしゃられ、先生の沖縄からの帰りは飛行機であった。山田先生の沖縄滞在は二潮の約20日で、特に真正ホンダワラのある種を採集したいご希望であった。当時のフィールドノートを見ると、昨日は港川、今日は波の上、翌日は糸満と、各地を採集し、さらに北部に向かって安謝、大宜味、そしてジープに乗って、琉球大学の国頭にある与那演習林の宿舎に泊まったの沖縄本島北端の

辺土岬への採集など、潮の良い日はほとんど毎日出かけ、私はその都度一緒させていただいたが、そのほかに琉球大学の香村真徳さん(当時助手、後に教授)や米国留学から帰国したばかりで那覇に滞在していた東京大学地質学教室の小西健二さん(海藻化石の研究者、後に金沢大教授)も時にお供をした。食事のあと、採集中、あるいは行き帰りのバスの中などで、「干天に慈雨」を得る如く私は貪欲にいろいろと海藻についてお尋ねした。随分不躰な質問もあったと思うが、先生は嫌なお顔はされず丁寧に教えて下さった。あるとき、採集した海藻から離れて、論文の中で系統や類縁などの論議を先生がほとんどなされないことについて伺ったことがある。事実の解明が進めば自然と明らかになることでしようという趣旨のお言葉で、むやみに系統論を振りかざすことには先生は批判的であった。このほか、昭和初期にアメリカに初めて留学されたときの話、英会話のこと、ベルゲーゼン博士(F. Boergesen 1866-1956)のこと、北大に植物分類学教室を創設するに当たって各地へ海藻採集で出かけたことなど、貴重なお話を幾つも伺った。知人のご招待の山田先生に連れられて行った那覇市の名門料亭“那覇”，琉球大学生物学教室の皆様のお招きで先生とご一緒した料亭“京屋”での沖縄料理も忘れられない思い出である。山田先生とご一緒させていただいた沖縄での二潮の期間は私にとって素晴らしい経験と勉強の日々であり、楽しい毎日であったが、同時に先生に対する畏敬の念を一層深くした日々でもあった。

エピソード

私は翌年早々奇しくも山田先生が初めて留学されたバークレイのカリフォルニア大学に行くことになった。先生は親切に推薦状を書いて下さり、またパーペンス教授(G.F. Papenfuss 1903 - 1981)とシルヴァ博士(P.C. Silva)を、先生が留学当時の先生方であったセッチェル教授(W.A. Setchell 1864 - 1943)とガードナー博士(N.L. Gardner 1864 - 1937)になぞらえて、私の渡米を激励して下さいました。

山田先生が病床の岡村金太郎先生に乞われて、岡村先生の畢生の名著、日本海藻誌(1936)の校正を行い、さらに岡村先生亡きあと海藻標本や蔵書の整理をされたことは良く知られている。山田先生は東京大学のご出身であるが、水産講習所の教授で、先輩でもあった岡村先生の指導を受けたこともまた良く知られている。岡村先生は「海藻学ヲオヤリナサイ」(1927)と題する小文の中で、「(わが国の海藻研究で)自分がやったのは大通りの道路を開いた位のもので、遠藤(吉三郎)君がその処々に少しずつ村落を作った様なもの・・・」と書いておられるが、その大通りの道路は山田先生によって拡張され、補強され、整備され、長く伸ばされ、さらに数々の部落が弟子たちや孫弟子たちによってひしめくように作られた。日本藻類学会もまた山田先生を中心に創設された。日本の藻学の今日の隆盛は山田幸男先生がおられたからこそその感が強い。

(千葉県立中央博物館)

川嶋 昭二：山田幸男先生と宮部金吾博士

“The greatest algologist”これは1950年の秋の頃、私が北海道大学理学部植物学科の2年目学生のとときに、かつて札幌農学校に学んだ父に促されて北大の学問的シンボルとして全学の教官、学生が敬愛しなかつた老植物学者、宮部金吾博士を農学部の名誉教授室に訪ね、問われるままに山田幸男先生の下で海藻分類学を学びたいと希望を申し上げたところ、博士がそのことを心から喜ばれ海藻研究の大事なことを説かれた中で山田先生を評して述べられた言葉です。まだそのこと

の何たるかもよく心得ていなかった私でしたが、宮部博士の“The greatest algologist”という言葉が身震いするほど強烈に響いて、そのときの情景を50年を経た今でもはっきりと思い出します。

1930年に北海道大学に理学部新設の議が決まったとき、宮部金吾博士はその創立委員として新設する植物分類学講座を我が国における藻類研究の中心と位置付け、自ら東京大学に足を運ばれて山田先生を札幌に招博された、ということは私たち分類学教室に学んだ